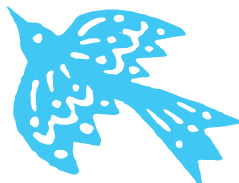




デ ス
DEATH ★ガール！

日部星花／作



DEATH★ガール

プロローグ

- 1 霊界の日常
 - 2 死神学院入学式
 - 3 謎の黒猫
 - 4 少年ユーレイとのご対面
 - 5 ユーレイ少年の想い人
 - 6 黒い影との戦い
 - 7 霊感を持つ先生
 - 8 たのみごと
 - 9 文化祭準備期間！
 - 10 魂喰い蝶（こんくいちょう）
 - 11 パニック！ 魂喰い蝶せん滅作戦
 - 12 消えた？
 - 13 つかの間の帰還
 - 14 見つけた？
 - 15 文化祭当日
 - 16 真実
 - 17 決戦！ VS 蜃気楼
 - 18 脱出！
- エピローグ

プロローグ

——銀の光と白の光が交錯した。

幾何文様が彫られた壁に囲まれた部屋には、あわただしい足音が止まることなく響いていた。……動き回る者達の服装はバラバラで、一見統一性がないように見える。

「地点Bで例の悪魔の反応！ 間違いありません！」

「いつの間にそんな遠くまで来たんだ？ 地点B担当の死神は何をしているんだ！」

ただ、彼らには一つだけ、共通点と言っていい共通点があった。

肩に担ぐ、大振りの鎌。そう……まるで物語の中に出てくる、

——死神のような。

「例の悪魔は姿を自由に変えることが出来ます！ ふつうの人間に化けられたら、識別が難しくて手を出せません！」

「ええい、上層部からの指示はないのか！ 会長……雨城筆頭あましろ死神からは！」

「残念ながらありません！ われわれだけで対処しなくては、」

「くっ……、おい、皆集合しろ！」

年かさの男の声に、若い人たちがいっせいに「はいっ」と返事をした。

「腕のいい死神を選出し、例の悪魔を倒す準備！ いいか、絶対に逃すなよ！」

「はい！」

「あの悪魔は、『蜃気楼』として恐れられてきた実力を持つ！ 各自油断だけはしないこと！」

張りつめた空気の中で、部屋のコンピューターらしき液晶だけがちかちかと光を発している。

再び大人たちがあわただしく動き始めると、液晶の光は赤く色を変えた。

「必ず捕まえる！ 我ら死神協会の名に懸けて！」

「はい！」

声がそろそろ。

その声に呼応したかのように、机に遭った書類が何枚かはらりと地面に落ちた。

1 霊界の日常

「ハッピーデーストウーミー。ハッピーデーストウーミー。ハッピーデーストウーミー。ハッピーデーストウーミー。ハッピーデーストウーミー。おめでとー、あはははは」

「いおりお姉ちゃん、目が笑ってないよ」

かわいた笑い声を立てて、ふっと目の前のケーキのろうそくを吹き消すと、机の反対側に座った可愛い女の子……しずくちゃんに指摘されてしまった。

だってしょうがないじゃない！

自分の命日を、あの世で祝うとか、そんなのむなしすぎるんだから！

鼻をすすりながら目の前のケーキを切り分ける。実は頬張ってみても味はない。まあそれも当然のことだ……何せここは生者はどこにもいない、死者の世界なのだから。

死者に食事は必要ない。これはただの真似事なんだ。

「いおりお姉ちゃんが死んでから、一年だね！ マイナス一歳だね！」

「嬉しくないよ」 ぜんっぜん嬉しくないよ！

私は机に突っ伏した。しずくちゃんの気遣いが痛い……。

「そっか……それにしても、あれからもう一年か……」

つぶやいて、ケーキをもう一口。ため息をついた。

……私の名前は井角伊織、故十三歳。

生前、特に積んだ徳もなく悪行もなく、天国にも地獄にも行けなかった『ただの人』。

中学一年生で交通事故で死亡、死後の世界……俗に霊界と呼ばれるこの世界で、今は生まれ変わるその時まで、隣人の死者と仲良くやる毎日だ。

霊界というのはとてつもなく広く、とにかく生まれ変わりを待たたくさんの死者たちが暮らしている。死者の中でも徳を積んだ人間は天国へ、罪のある人間は地獄に行くわけだが、霊界にいる者は霊界にいる者で、それぞれ特徴があったりするのである。

たとえば、

「……ねえしずくちゃん」

「なあに、いおりお姉ちゃん」

「しずくちゃんは八歳で死んじゃったのよね。じゃあマイナス何歳になるの？」

「数えきれない歳だよ！」

……そう、中にはこのように、いつまで経っても生まれ変われない死者もいるわけだ。

まあ、たしかに霊界では生きた人間とそうは変わらない生活ができるけど、全員が全員おだやかにこの世を去ったわけじゃないのだ。当然私にも未練はあるわけで。

「あああ、少女マンガみたいな恋がしたかったー……ッ」

「うんうん。いおりお姉ちゃんは美人さんだから、きっとできてたよね。生きてたら」

「でもここにはイケメンいないよー。元イケメンはいるけど、現役がないのー……」

「いおりお姉ちゃん」

ぼん、と肩を叩かれた。

「もう諦めよう？」

さ……諭された。八歳（マイナス数えきれない歳）に諭された。

どこにも持っていきようがない敗北感を抱えながら、私は再び机に突っ伏す。

……そう、未練なんかくさるほどあるんだ。

幼い弟もいたし、両親には親孝行もろくにしていないうし、やりたいことだってあったのに。でも、叶わない。道路に飛び出して、死を感じたあの瞬間から、私は既に後悔するしかできなくなってしまうのだから。

……なんてことを考えているところで、不意にガチャガチャと音がした。

なんの音だろうと思って顔を上げると、しずくちゃんが輝くような笑顔を向けてくる。

彼女の目の前にあるのは、少しクリームがついた空の器。……私の前にも空の皿。

ってケーキを完食した音かいっ！ しかもご丁寧に私の分までっ！

「ごちそうさま、いおりお姉ちゃん。おなかいっぱいだったみたいだから食べちゃった」
しずくちゃんは笑った。……私は笑えなかった。

「どしたのいおりお姉ちゃん。悲しそうな顔して」

私はそのまま無言で席を立ち、玄関の戸を開けて、郵便物を確認することで心を落ち着ける。……がんばれ伊織、相手は八歳（マイナス数えきれない歳）だぞ。

心を落ち着かせてリビングに戻ってくると、しずくちゃんは綺麗に整えられた長い髪をいじっているところだった。……ふう、私の動揺は悟られてないようだ。よかった。

「いおりお姉ちゃん、何かお手紙来てたの？」

「あ、うん。まあ、一通だけだけど」

まさか、ケーキを完食されたことへの怒りを鎮めるために、外に出たんだよなどと言えるはずもなく、私はあいまいな笑みを浮かべて手紙を机に置いた。

そして二つのカップに紅茶を注いでいく。

「……いおりお姉ちゃん、開かないの？」

「ん？ ああ……、何かの広告かなって思ったのよ」

人間の世界と同じような生活ができるからか、ここ霊界には意外と仕事をしている人が多い。お金と言う概念はないけど、物を売り買いする真似事くらいはできる。

いわゆるワーカホリックという人種は、わざわざ下級天使に頼んで、オフィスを建設したりしているそう。日本にある企業みたいなものもいくつかあるようで、特筆して悪いものがなければ、天使たちや神様も承認してるらしい。

たまにそういうところから広告が届いたりするんだよね。

「でも、これ……死神協会のスタンプが捺してあるよ？」

「え？」

手紙をしずくちゃんから受け取り、封筒をよく見てみる、

確かに、黒い死神の鎌の印は、死神協会のしるしだ。

「もしかしていおりお姉ちゃん、死神適性検査受けたの？ それなら合格通知かもよ？ 受かったらすごいよ、いろんな特典がもらえるよ！」

「たしかに受けたけど、それはないわねー。残念ながら、その場で不合格だったし」

私は苦笑する。しずくちゃんほくちびるを尖らせた。

「えー、残念。死神になったら、少し生まれ変わるの遅くなっちゃうけど、次生きる場所を自由に選べるし、天界に行けたり、神様に会えたりするのに！」

——— 死神。

というのは霊界での特別な職業の一つで、死の間際の生者に死期を知らせたり、その魂が

正しく裁きの場へ向かえるようにサポートするものだ。

いわゆる靈感が強い、と言われていた死者が適性検査に応募して合格すると、死神見習いとなって死神学院で修行することができる。

しかも、時に悪霊や魔物、悪魔と戦わなくてはならない危険があるのを除けば、信じられないほどの厚待遇を受けることが出来るのだ。たとえば天界……つまり天国に行けたり、

……現世に降りたりする権利も、もらえる。

「でも、もうダメダメだったのよー。検査でへましちゃって、靈力を計る装置を壊しちゃったし」

ふつうの人ならば装置に手をかざすと、光が出るらしい。

……だけどそれが私の場合、なぜか光が出るどころかぶっ壊れた。

少し赤い光が見えたような気がしたけど、残念ながら悪いものが憑いてるんじゃないかとすら疑われてしまった。……死者にだれが憑りつくつうんじゃないボケ。

「うそー、そんなの初めて聞いたー。すっごーい！」

どうしよう、しずくちゃんの心からの賞賛が、今は皮肉にしか聞こえない。

「ほんとはね、死神の基本属性らしい雷、水、火、大地、闇、光の六つの中のどれかの色の光が、装置からパーツとでるはずだったんだけどね。出たのは残念ながらぶすぶすという黒い煙でしたー、あっはっはっは」

「いおりお姉ちゃん、目が全く笑ってないよ」

これが笑っていられるもんかつっ！

私が再び机に突っ伏すと、しずくちゃんが「とりあえず開けてみようよ」と言って、封筒の開け口をていねいに切った。

「あ、やっぱり、何か入ってるよ、いおりお姉ちゃん」

「……もう、この期に及んで、何の用なのよー」

しずくちゃんを取り出した手紙を渡してくれる。わくわくした目だ。

内心ため息をつきながら、手紙を開く。

そして中に書かれた差出人を読んで、私は目を見開いた。

「し、死神協会副会長、序列二位……死神学院理事長」

しずくちゃんも青みがかった大きな黒い目を丸くする。

……いったいどういふことだ。何が起きているんだ。

そこにはなんと『死神学院入学式のご案内』と書かれていた書類が入っていたのである。

……ふむ、と一度うなずいて……私は一度封筒にそれをしまった。そして再び開けて、中身を取り出す。

やはりそこには、『入学式のご案内』と書かれていた。

——私は封筒を振りかぶった。

「待って待っていおりお姉ちゃん！ 捨てちゃダメ、現実から目をそむけちゃダメ！」

「だって今頃こんなの、何か企んでるのバレバレだし！ 絶対装置の弁償とかさせられる

し！ 私は騙されないわよ、ふふん、しかもそもそも、あんな結果で、序列二位の第一級死

神が私ごときに手紙を送るわけじゃない！ そうだ私は騙されない!!」

「落ちていていおりお姉ちゃん！ 絶対に行くべきだよ、もったいないよ。現世でイケメンさんを鑑賞できるかもしれないよっ」

「そんな不純な動機で死神を務められるかあ！」

「いおりお姉ちゃん！ さっきと言ってることぜんぜんちがうよ！」

ぜえはあ、と二人で言い合いをして、お互いに深呼吸をする。

「……いったん落ち着こうか」

「そうだね」

しずくちゃんは封筒を見ると、「うん、本物だよ、やっぱり」と呟いた。マイナス数えきれない歳には、死神協会のスタンプ判別もお手の物らしい。

「行ってもだいじょうぶだと思うよ、いおりお姉ちゃん。じゃないと、後悔するよ。いおりお姉ちゃんも、何かやりたいことがあって、死神適性検査を受けたんでしょ？」

眉を寄せて、彼女は言った。

確かにそうだ。恋うんぬんの話はナシにしても、私はまだ現世と繋がりを持っていたいから、死神の適性検査を受けに行っただんだ。

「……わかったわ。行ってみる」

そう言っつて、とりあえず椅子に腰かけると、しずくちゃんは控えめに、「装置の弁償についての場合の対処法、いっしょに考えてあげるね」と言った。

……やっぱりその可能性、しずくちゃんも考えてるんじゃないかあ！

2 死神学院入学式

……死神学院の生徒は、見た目が若い生徒が多い。

と、言うのも、基本的に死神見習いとして選ばれるのは、靈感の強い人間であり、その靈感は、幼少期や若い時期に発達しやすいからだ。

もちろん、熟練の死神や上級生たちには、見た目が大人な人もいる。七、八歳くらいのしずくちゃんみたいな上級生もいるけど、彼らがマイナス何歳なのかはわからない。

そして学院には制服があるが、その着用は義務ではない。なぜかという、上級生におじさ……げふんっ、年配の方がいる場合もあるからだ。

おじさ……年配の方がブレザーに似た制服なんて着たら、見るも無残な状況になるだろう。それはあまりにもあんまりである。

……それにしても、不可解なこともあるもんだわ。

そもそも適性検査で一度不合格になっていないはずなのに、なんで私は書類を見せたら、普通の新生たちと同じように入学式に参加できたの？

「ねえ、あの……元、日本人だったりする？」

「え、と……まあ、日本人だけど」

むすつとしてしていると、隣の席の、金髪の可愛い女の子に声をかけられた。

うわ、何この美少女。すっごいかわいい。

……私と同じ十三歳くらいに見えるけど、この子ははたしてマイナス何歳なのか。

「ねえ、もしかして、あなたも死んだばかり？」

「うん、まあ……少し前にマイナス一歳になったかな」

「うわあ、私も同じ時期に病気で、よ。仲良くなれそうね」

……いや、話題が暗すぎて、こっちはそんな気になれないんですけど。自分の死についてそんなにニコニコ語れないんですけど。

微妙な顔の私を無視して、彼女は勝手に「私はアリシア。元イギリス人よ」と自己紹介をする。……いや、別に聞いてないけれども。

まったく、私の周りには、しずくちゃんしかり、自由人が多すぎるんじゃないのか。

「えーと、よろしく、アリシアさん。私は伊織。こういうときって、霊界の言語調節って、便利だよ」

「アリシアでいいわよ。まあ、そうね。私日本語話せないし。何かと霊界って便利よねー」
からからと笑うアリシア。おおらかなのか天然なのか器がでかいのか……。

「私の属性は死神協会長と同じ、『水』なの。伊織は？」

黒い煙だよ☆ と答えられるほど私の器は大きくなかった。

ただ、私にはできたばかりの友だち相手に、嘘をつけるほどの甲斐性もなかった。

私は目を逸らしながらつぶやく。

「えーと、適性検査で、装置……壊しちゃったから、わかんないのよ」

「装置を壊した？」

ほらあ、驚いてるよ。目丸くしてるよ。だから話したくなかったんだよ。

「えと……元氣出して？ ね？」

……。……。ねえしずくちゃん。いおりお姉ちゃんのはっけから心折れそうなんだけど、
どうしたらいいと思う？

——と、その時。

「新入生諸君」

今まで抑揚にかけた話し方でしゃべっていた校長（と書いて全ての元凶と読む）が、ひと
きわ大きい声で言ったのが聞こえて、私たちは居住まいを正す。

あごひげをたくわえた、スーツ姿の初老の男性……彼が死神協会副会長にして、死神学院
の理事長だ。そして、霊界で二番目の強さを誇る、第一級死神。

「本日はよく集まってくれた。適性検査合格、ならびに入学おめでとう」

そう、とりあえず理事長先生、あなたに聞きたい。検査の合格基準は何なんだ。
入学者は全員装置を壊さなきゃいけないのかな？ まさかそんなわけないよね？
半眼になる私に対して、入学式会場の中央の壇に立つ理事長は、淡々と続ける。

「では早速実力試験を行う」

……。

……なんて？

幻聴か、私も末期かなと思っただけど、どうやら違うらしい。アリシアが口をぽかんと開けているし、近くの席に座っている他の新入生たちもざわめいている。

ひとついいだろうか。

……いったい何が悲しくて、入学早々試験なんか受けなきゃならんのじゃ！

「諸君の戸惑いはわかる」

私を含めた全ての新入生たちの心の叫びに応えるように、理事長はあくまでも淡々と言う。……わかるならやるなと思っただ新入生は、私だけじゃないに違いない。

「ただ、死神という仕事は危険を伴う。覚悟の足りない者に務まる責務ではない」

……また長くなりそうだ、と私がげんなりしたとき、前の席から書類が回ってきた。

その表紙には、霊界の住人ならば誰でも認識できる文字で、『任務通達書』と書かれていた。……間違いなかった。

マジか……。理事長、ガチじゃん……。

「よって、諸君の覚悟と実力をはかるため、それぞれに簡単な実力試験を用意した」

私は表紙を開く。すると、中学生くらいの少年の顔写真と、カンタンなプロフィールが書かれた紙が現れた。

その写真の下には、たった一文。

—— 『彼の魂を、在るべき場所へ』

「何よ、これ」

私は眉を寄せ、再び書類を読み返す。

まさか任務って……魂を在るべき場所へ、ってこの人を、成仏させろってことなの？

そんなこと、まだ死神見習いですらない私に、できることなわけ？ 人間を成仏させるの

が、簡単な任務なの？

まったくもって意味がわからず、私はただ理事長を睨み上げるしかできない。

「なお、任務の期間中、諸君らには第二級以上の死神たちがサポートとしてつくことになる。

助言を求めるには、これを使いなさい」

理事長の言葉が切られると同時に、煙と共に私たちの手元に現れたのは。

おお、これはもしかして、俗にいう死神の鎌、

「……………あれ…………？」

じゃ、なかった。

私たちの手元に現れたのは、草刈り鎌。…………そう、農業とか、草むしりに使うあれだ。小学生の地域貢献活動とかに使われる、ポピュラーな感じの市販品だった。

「ムードも何もあつたもんじゃないわね…………」

鎌を手にして思わず呟いた時、となりのアリシアが軽く「わっ」と声を上げた。

何事、と思えば彼女の方を見てみると。

「すごいっ！ ねえ見て伊織、これ霊力を込めたら、大きな死神の鎌になるみたいよ！ とってもきれいな！」

…………興奮したアリシアが手にしていたのは、装飾が施された青い刃の大きな鎌だった。

た、確かにきれいだけど…………わっバカ、刃先をこっちに向けるんじゃないやありません！

アリシアの言葉を聞いて、周りの新入生たちが、草刈り鎌をどんどん立派な死神の鎌に変化させていく。それに比例して、怪我人(?) の出る可能性も増していく。

「変化の仕方はわかったようだな、諸君」

ちよつと理事長、諸君じゃないよ。そんな満足げな顔してないで止めなさいよ。

つてか、周りのみんなもなんでアリシアに便乗して鎌大きくしてるの？ なんて誰も止めないの？ ……え、私がついていけないだけ？

なんだか腑に落ちない気持ちになりつつも、私も草刈り鎌を握る手に力を込めた。

わ、私だって一応新入生なんだから、きつとやればできるはず。

私だけ置いてけぼりだなんてごめんだし、鎌を大きくしてみせようじゃないか。

「せーの…………えいっ」

「ねえどうしたのいおりお姉ちゃん、泣いてちゃわかんないよ……え？ なに？ 草刈り鎌？ いおりお姉ちゃんいつ農家さんになったの……ん？ 鎌を死神の鎌に変化できない？ うーん、そっか……じゃあ腹をくくって装置の弁償するしかないね」

「もうやめてええええ!!」

容赦ない言葉にさげんで机に突っ伏す私。心が痛いよ！

しかもしずくちゃん、なぐさめる気ゼツタイないでしょ、それっ！

……そう。すでにお察しかとは思いますが、私は草刈り鎌をメタモルフォーゼする(かっこつけ)ことはできなかったのだ。

そもそも、生きている間に、靈感だとか霊力だとか、そんな非科学的なこととはまったくの無関係だった私が、死神になると望んだことから無理な話だったんじゃないのか？

やはり腹を決めるしかないようである。

「いおりお姉ちゃん、元気出してよ」

いすに座ってお茶を飲んでいたしずくちゃんが、肩に手を置いてくれるが、もうなぐさめる気が皆無なのはわかっているの、悲しくなるだけだ。

彼女は……マイナス数えきれない歳の美少女ミスしずくは、かわいい顔して何を考えてるんだか分かったもんじゃないのだ。

「んーまあ、いおりお姉ちゃんの弁償うんぬんはともかくとして、その草刈り鎌が、死神の鎌にならないっていうのが大変なんだよね？」

……なぜそれがともかくしてなのかはともかくとして、その通りなんだよね。

こんな小学生が使うような安っぽ……ゴホン、小さい鎌じゃ、任務達成どころかサポート死神とコンタクトすらとれないんだから。

どうする井角伊織。入学早々退学、もとい弁償の危機。

「でもまあまず、会ってみようかなって思うのよ、そのユーレイ少年に。現世でふよふよ漂ってるみたいだからね」

「なんか、ふよふよ漂ってるって、人魂みたいだね」

「やめなさいそういうこと言うの。ユーレイよ、ユーレイ！」
まったく、面白いからって、なんでもかんでも怪談にしないでほしいよ。
あ……でも、ユーレイも十分、怪談か。はあ……。

*

……セミの声なんて、ずいぶん久しぶりに聞いた気がする。

許可をもらって現世に下りてきた私が、最初に思ったことはそれだった。

どうやら今は九月らしく、セミしぐれというほどは鳴いていないが、夏の暑さはまだ残っている。

霊界は生物の存在しない場所。あの世だから当然だ。

もちろん植物もないし動物もないから、セミの声を聞く機会もないわけで。

「……市立夫畑中学校、だったわよね」

そこが例の少年の霊が出るという場所だ。

なんだか少しだけドキドキしながら、私は学校の屋上に下り立った。フェンスの真下を覗くと校庭が広がり、ずっと遠くを見ると、山がある。

おおっ、これよこれ。懐かしいわ、この眺め。学校の屋上からの眺めって、こんな感じよねー！

それにしても、と私はきよろきよろと辺りを見回した。肝心の少年はどこにいるんだろ。

「……………なんか、いないし……………」

おつかしいなー、書類によると、少年は屋上から落ちたらしいのに。

だから、少年が現れるのは屋上だと踏んでただけだな。

「そううまくはいかないか……………」

肩を落として、私はフェンスから離れる。

……っていうか、よく考えてみたらこれ、『落ちた』って書いてあるけど、要はその……
飛び降りたんだよね？

それって、いじめられてたりしたのかな、その子。

いじめられて、それを悲観して、ここから飛び降りて。

少年の霊はいじめの加害者に恨みを募らせながら、夜な夜な屋上に現れ……、
きゃあああああああ!!

………つて、バカか。

なんであの世の……霊界の住人で、しかも死神学院の生徒である私が、ユーレイを怖がる
必要があるんだ。

そもそも私も同じような存在でしょ。正確には私はまだ死神じゃないし。
むしろユーレイに近いところにいそうだ。それこそ、死神より。

「だ、大丈夫だいじょーぶ……それに今、昼だし？」

仮にその少年が悪霊じみたやつでも、同族の私に呪いとかはかけられないはずだ。
だって、私もう死んでるしね!

そ、そう、だからゆゆゆユーレイなんてまったく怖くないし!

『……さつきからぎゃあぎゃあとうるさいぞ。気が散るから黙れ。寝ることもできないだろ
う』

「うるさいって何よ、うるさいって! 私は今………ん?」

……今、誰がしゃべった?

おかしい。私のことが視えるのは、霊感を持つ稀な人間でない限り、同類の存在………つま
り死んでいる者以外はありえない。

つ、つまり。ゆ、ゆゆ……。

「だ……誰!」

意を決して、私は振り向いた。

………後ろには誰もいなかった。

「なんで!」

い、今、確かに誰かしゃべったのに。うるさいって言ったのをこの耳で聞いたのに!
どどど、どうして誰もいないのよっっ!

『どこを見ている。ここだ、ここ!』

「どっつて……ここ、だけ、ど………」

声のした方……足元を見て、私は絶句した。

そこにいたのは、黒い毛と銀色の瞳が美しい、黒猫だったからだ。

『バカかお前は。すぐそばにいなながら気づかないなんて、どれだけ脳みそがゆるいんだ』
「なんで猫に毒吐かれなきゃいけないわけ？ ……っていうか、あんたなんでしゃべれん
のよ、猫のくせに！」

理不尽な言葉に憤慨する私。誰の脳みそがゆるいつてのよ！

しかし同じように、黒猫の方も私の言葉に気を悪くしたらしく、ぐるぐる、と喉の奥で威嚇してくる。

『さっきから猫、猫と呼び捨てか？ 俺とお前は初対面だ。失礼だろう。敬称をつける敬称を』

「そっちはお前呼ばわりしといて、エラそうにしないでくれない？ ね、猫さんの分際で！」
『……………やっぱいいい。猫さんは少し微妙だな。…………俺の名前はクロだ。だから次からは
クロ大明神様と呼べ』

「ふざけんな自分で言つといて！ しかもなんで会って数秒の動物をあがめなきゃいけないのよ！」

にらみ合う私と黒猫。

…………そして。数秒間のガンの飛ばし合いに決着がつくと、私と黒猫のあいだには確かな友情が芽生えた。

右前脚と右手を触れ合わせる。

「…………妥協するわ。猫呼ばわりはやめる。…………クロ、私の名前は井角伊織。これからよろしく」

『別にお前とよろしくする気はないがな』

友情は気のせいだったのかもしれない。

気を取り直して、私はこほんと咳払いをする。

「それで？ クロはどうして学校の屋上にいるの？ なんて猫なのにしゃべれるの？ 何か魔法でもかかっているわけ？」

『は？ ……お前、もう中学生だろう。まだ魔法の存在なんて信じてるのか？ 脳みそは無事か？』

「無事だわ！ 冗談に決まってるでしょ！ いい加減に質問に答えてくれないよ」
 「なんで会って間もない猫に、脳みその心配されなくちゃいけないのよ。」

黒猫はいぶかしげに銀色の目を細めると、ため息でもつきそうな声で言った。

『しゃべれるのは当然だ。俺は死神だからな』

「嘘つくな」

猫の姿をした死神なんていてたまるかってんだ。

『嘘じゃない。任務上靈力を隠す必要があったから、姿を変化させているだけだ。……見たところお前は死神学院の生徒だな。鎌はどうした』

「……」

その言葉に、私は再び絶句する。

……この黒猫は、なんでそこまで霊界事情にくわしいんだ。

『さては変化させられなかったな。なるほど、それならお前に目付け役の第二級死神がいないことにも説明がつく。ふーん……へえええ……落ちこぼれか』

「………認めます。あなた様はご立派な死神様でございます」

バカにしたような口調に怒りをこらえつつも、私は手のひらを返して平身低頭。ちなみに私の座右の銘は『長いものには巻かれろ』である。

……位や強さ、階級はともかく、この情報量からして黒猫が死神なのは間違いなさそうだ。それに、なんてったって、しゃべるし。

『だが落ちこぼれ。お前はこれからどうする気だ？ 目付け役の死神がいなくて、任務が出来るのか？ 見たところあのジジ……学院理事長の例年の無茶ぶりなんだろう？』

例年ってこれ、毎年あるのか……。さすがだなあの人。

それとっ！

「落ちこぼれ言うな！ 呼ぶなら伊織って呼んでくれないよ」

『お前、さつきから目上の人間に対して態度がでかいんじゃないのか』

「はあ？ 人間？ ……猫じゃない」

『……何か文句がありそうだな？』

「ぐ……ありません。ぜひとも伊織とお呼び下さいクロ様」

くっそう、なんで私が黒猫ごときにへつらわなきゃならないんだ。

今に見てる、いつか見返してやる。

しかし、クロは怒りと闘志を燃やす私とは対照的に、満足げにぐると喉を鳴らした。

『まあいい。ここで会ったのも何かの縁だ、お前の目付け役は俺が引き受けてやる』

「クロ大明神様！」

強かったはずの闘志はあっさりと折れ、私はひれ伏した。五体投地である。

ああよかった、これからどうしようと思ってたところだったんだよ。

これぞ渡りに舟。猫だけど。

『代わりに、お前には俺の任務も少し手伝ってもらおうからな。……まあ、詳しい内容を教えることはできないから、俺の指示に従うだけでいい』

「ええもう、私にできることならなんでもやりますよお」

私ほもみ手をしながら笑顔で答える。

……クロの任務が何なのかは知らないけど、きっとこんなにエラそうなんだから、彼は少なくとも、学院では特待生にあたる『死神見習い』以上、つまりプロの死神だろう。

第三級か第二級、どちらかはわからないけど、きっと死神のノウハウを彼から学ぶこともできるはずだ。

つまり退学になる確率が減るかもしれない！

『それで、与えられた任務とやらはなんだ？』

「えーと。少年のユーレイを成仏させろっていうものなんだけど……」

そう言っって、私が書類をクロに見せようとしたその時だった。

「ねえ、クロ、いる？」

4 少年ユーレイとの「対面」

まだ声変わりもしていない、少し高めめの少年の声が耳に届き、私は振り返る。クロも私と同じで、霊界にいるべき存在だ。特定の人以外には視えない。

それが視えるということは、つまり今度こそ、……『彼』だろう。

「あれ？ 君……俺の声が聞こえるんだ？」

「……あなたは」

私より、少しだけ高い身長。大きめの制服。焦げ茶色の髪。

……そして何より、その柔和な顔立ちは、書類の少年の顔に瓜二つだった。

「あ。もしかして君も俺と同じで、霊なの？」

にっこりと笑う少年に、クロがにやあ、と一声鳴く。

私は目を細めると、ゆっくりと首を振る。

「ううん、違う。私は霊じゃなくて、死神よ。名前は井角伊織。好きに呼んで」

「死神」

大きく目を見開く少年は、食い入るように私を見つめたまま叫んだ。

「あなたは、夫畑みづはた中学校一年三組、泉幸人君いずみゆきとで間違いないわね？」

『何が死神だ。学院生徒で、しかも落ちこぼれが死神を名乗るな、このバカ』

「……つてちよつとおおお!!」

クロのひんやりした声が、私の見栄をバキバキに折る。

い、い、今、せつかく決まったと思ったのに、何してくれてんのよ！

「ち、違うの、ダメそうとかそういうことを考えてたわけじゃなくて！」

「え？ いや、ダメすつて何？ 俺はたしかに泉幸人だし、多分死んだし、間違っ

思うけど。もしかして、迎えに来てくれたの？」

「……へへ」

その言葉に拍子抜けして、私は目をぱちくりさせてしまう。

もしかして彼は、クロが何と言ってるか、わかってないのだろうか。

「あの……もしかして幸人君は、こいつが何て言ってるか、わからない？」

『こいつとはなんだ、こいつとは』

「え？ クロは猫の霊だろ？ しゃべらないよね？」

いえ、現在進行形で文句を言ってますよ。私に。

……でもまあ、とりあえずよかった。私は頭にはてなマークを浮かべる幸人君を見て、ホッと息をつく。

もし今のが聞こえてたんなら、めちやくちや恥かくところだったよ。

「いやあ、俺、三か月前くらいからここにいるんだけどさー。いい加減死んだんだから、天国に行くべきなんだろうなって思ってたんだけど……成仏ってどうやればいいのかわからなくて」

「そ、それは……大変、だったね……」

予想外に軽い態度に、私は少々面食らいながらうなずいた。

なんで私の周りにはアリシアといいしずくちゃんといい、自分の死を開き直って語れる人間が多いんだろう。

「クロは、一か月前くらいから、よくここに現れるんだ。黒猫だから、クロって名前を付けたんだけど安直だったかな。……きつとお前も、成仏できないんだよね。俺と同じでさ。な、クロ？」

『違う』

「そっかさっかー、やっぱりお前も大変なんだな、クロ」

「……」

話、全然かみ合ってませんけど……？

だがそれを、クロを抱き上げてニコニコしている幸人君に言うのははばかれて、私は口をつぐんだ。しかも幸人君は、クロっていう名前の名付け親らしいし。

……世の中には、知らなくていいこともあるだろう。

「それで、死神さん。えーと、結局俺は成仏できるの？」

「……それなんだけど」

やり方が、私にもわからないから、困ってるんだよね。

成仏させられるのかなんて聞かれても、初めての試みだから、協力するにしても何をどうすればいいのか見当もつかない。

「まあ……うーん、大きな未練を消せば、成仏できるんだろうけど……」

それっぽいことを言って幸人君を見ると、彼は眉を寄せた。

「未練か……多分あるにはあるんだろうけど……わかんないな。俺さ、あそこのフェンスに寄りかかってたらそのフェンスが壊れて下に落ちちゃったんだよ。もうびっくりして、正直死んだってこともいまいち理解できてないって状態」

「え？」

「ほら、あそこのフェンス。新しくなってるでしょ？　そこからヒューンって」
指差された方向を見ると、確かに一枚だけフェンスの色があざやかだ。

あそこだけ新しいと言うことは、どうやら間違いないらしい。

……ってことはつまり、彼の死因は事故だったのか。

私と、同じで。

「でも、一つだけあるかもしれないかも……」

「え、何が？」

つぶやかれた言葉に、私は目をしばたかせる。

「その、未練ってやつ。少し後悔してることがあるんだよ」

……それを、聞いて。

幸人君の腕に抱かれたクロが、銀色の目を細め、一声「にゃあ」と鳴いた。

*

「ふーん……好きな女の子に、告白ねえ」

その『未練』の内容を聞いた私は、幸人君を半眼で見つめた。

彼は真っ赤になって弁明する。

「いや、だから！　気になってるだけなんだって。まだ好きかどうかはわからないんだ」

「……別に私相手に照れることなくない？」

言い訳する必要なんてないだろう。ましてや、私は彼の知り合いですらない。

それに、私たちはもう死んでる人なんだよ？　照れる意味ないじゃない。

……私はそんな冷めた思考を展開してみるが、もしかしたらこういうところが、生前彼氏
ができなかった理由なのかもしれない。

『それにしても、生きている人間に想いを伝えたかったというのが幸人の未練か。これはまた面倒な未練だな』

聞くなりいきなり文言うんじゃないよ、クロ。

「……幸人君。その子の名前はなんていうの？」

「……盛岡。盛岡舞奈もりおかまいなだよ」

「へえ……。その子、かわいいの？」

顔を赤らめてかすかにうなずく幸人君。これはもしや初恋、だったんだろうか。

……実にけっこうだけど、その反応で『気になっているだけだ』っていうのには少々無理がありますかね。

……んじゃまあ、とりあえず。

「さっそく会いに行くか」

「え……ちよつ……え……待ってって死神さん！」

「何？」

あわてた声で呼び止められたので振り向くと、やっぱり幸人君は焦った顔をしていた。

「今からは 今から行くの……」

「善は急げって言うでしょ。とつとど言っつてスッキリすればいいじゃない」

「急ぎ過ぎだよ！ ……それに心の準備が」

『どうせ告白したとしても、肝心の本人には聞こえないんだぞ。何を準備するんだ、幸人』

「……」

それを言ったらおしまいでしょよ、クロさん。

……しょうがない。そこまで嫌なら、と私は肩をすくめて幸人君に向き直った。

「……わかった。とりあえず、告白が彼女に聞こえないかもしれない……っっていうか聞こえない、という問題は置いておいて。私とクロを、その子に紹介してくれない？ 見てみたいから」

「いいけど。……ああ、それから」

うなずいた幸人君が、少し沈んだ表情をしたので、私は首をかしげる。

それから？ とくり返して尋ねると、彼は眉をしかめたまま顔を上げた。

「……あのさ。死神さんなら、悪霊みたいなのって、祓うことってできる？」

5 ユーレイ少年の想い人

「……はい？」

予想外の質問に、私は驚きのあまりすぐに答えることができなかった。

しかし、その私の沈黙を「是」ととったのか、彼はバツと頭を下げて言う。

「最近、盛岡の周りに黒い影みたいなのがあるんだ。そいつのせいでか、なんだか盛岡元気なくて……。死神さんに、その影みたいなのを追いついてほしいんだ！」

「……いや、私はどこぞのエクソシストでは、」

「お願いしますっ」

私の言葉をさえぎって、再度頭を下げる幸人君。話聞けよ、と少しイラッとしたけど、それと同時に私は感心した。

……もし私が生きていたら、幸人君は私の一つ年下になるわけだけど。

私が、彼の先輩だったとしたら、好きな人のためにここまでできる後輩に、手を貸してあげたい。

……だけどご存じのとおり、私は死神学院の中でも落ちこぼれだ。鎌も変化できず、しかも装置を破壊したという『輝かしい』経歴を持つ、問題児である。

その私が、得体の知れない影を祓うなんて、無理に決まっている。

だから、私は。

『……おい。なんで俺を見る』

……ご自身をプロだとおっしゃっているクロ大明神様を見つめた。

「ほら……だってクロ、今は私の仮目付け役だし。任務を手伝ってくれてもいいじゃない。

かわいい後輩にアドバイスしてよ、アドバイス」

『……目付け役は、生徒が暴走するのを止める役目であって、相談役じゃないんだが』

コソコソと会話をする私たちに、幸人君が懐疑の目を向けているのがわかる。うっ、ビミョーな視線が痛い。

「……頭かったいわねー。少しくらいヒントちょうだいよ。悪霊みたいなのを倒すのって

「どうやればいいのか？ 多分その影とやらを追い払わないと、幸人君の気持ちは晴れないのよ。」

『死神はそんな都合のいい魔法使いじゃない』

「……へええええ。できないんだ。プロの死神のくせに」

『……できないとは言っていない。ただ、実際に見てみないうちには、何も言えないと言っただけだ』

ちよつとむつとしたような声で反論してくるクロに、私は思わず唇を歪めた。

ふ……ちよろいな、この死神黒猫。

「えーと、どうしたの、死神さん？」

黒猫と話し込む私をいぶかしく思ってたか、おそろおそろという体で話しかけてくる幸人君。

それに対し、私は頭を掻いて苦笑いした。

「あ、いや。クロもやっぱり舞奈ちゃんを見てみたいんじゃないかなーって、それだけ。…

…その影っていうものを追い払えるかどうかは、実際に見てみないとわからないけど……」

……少なくとも、プロの死神であるクロには、それができる。

見た目はただの黒猫でも、彼(?)は最新の死神学院の情報を手に入れている。つまり、それだけの実力と地位はあるってこと。

クロの正体はくわしくはわからないけど、わざわざ黒猫に姿を変えているってことは、やっぱり力を持つベテランの第二級死神なんだろうと思う。

「……そうだね。じゃあ、行こうか死神さん」

その言葉に、少し不安そうにしながらも、幸人君は私たちに背を向け、屋上を出ようとする。

私はクロを抱えると、幸人君を追いかけて言った。

「伊織でいいよ。死神さん、なんかじゃなくてね」

*

……学校は、どうやら放課後に入ったばかりのようだった。

廊下や、教室を掃除する生徒の音が飛び交う中、私たち二人と一匹は、一年生の教室へと向かう。

当然ながら、私たちの姿は誰にも視えていないようで、違う学校の制服を着た私や、銀色の目をした黒猫が廊下を堂々と歩いていても、気にする人も驚く人もいない。

『どうした伊織、顔色が悪いが』

「……別に、何もないわよ」

誰も自分たちに、気づかない。……自分は確かにここにいるはずなのに、誰ひとりこちらを見てくれない。

「この出身じゃない私ですら、少しさびしいのに。」

「……幸人君はもつとさびしいんじゃないだろうか。」

「伊織。ここだよ」

死神さん呼びから、伊織呼びに変えてくれた幸人君は、一つの教室を覗いた。

扉の上のプレートを見上げると、一年三組とある。どうやらここが、生前彼がいた教室らしい。

「マイー、まだ帰らないの?」

「あ、ごめん。日直日誌、古谷先生のところに持ってかなきゃいけないし、ちよつとやることもあるから、先に帰ってていいよ」

「!」

突然、教室の中から響いてきた複数の声に、幸人君がびくつと体を強張らせたのがわかった。……どうしたんだろう、と思って首をひねると、かすかに耳に届いたつぶやき。

「……盛岡」

えっ、ウソ? いきなりいたの?」

「……もしかして、『舞祭』だから『マイ』って呼ばれてた女の子の方がそう?」

私がそわそわし始めたところで、二人の女の子が「バイバイ」と教室の中に声をかけながら、前の扉から出てきた。

それを、そこか緊張したような面持ちで見送る幸人君。

「……そっか。あの子たちも、彼にとってはクラスメイトなのか。」

それなら……緊張するのもわかる気がする。

『何を迷っている、幸人。とっとと中に入れ』

そう言ったクロの声が聞こえたわけではないだろう。

だけど、幸人君は、ぐっとあごを引くと、女の子たちが出て行ったことで開け放された前の扉から、ゆっくりとその中に入った。

『おいお前も行け、伊織』

「……わかってるってば」

命令しないでよ、と文句を言いつつも、私も教室内に入る。

……並ぶ机とイス。木のおい。そして黒板や、壁に貼られた時間割表。

それら全てがなんだかなつかしくて、私は思わず笑みをこぼした。

『……あれが盛岡舞奈か』

つぶやいたクロの視線の先には、黒髪を肩ぐらいまでのぼした、かわいい女の子がいた。

無言で、教室の中央にあるひとつの机を、ていねいに拭いている。

あの表情……あれは多分、自分の机ではないだろう。

……だとしたら。

「……あれ、俺の机だ」

驚いたような、呆然としたような声を漏らす幸人君。

その目には、信じられない、という感情がありありと浮かんでいる。

「……やっぱり、そうだったか」

私は、中央でぞうきんを持って立っている舞奈ちゃんを見つめた。

……死んだクラスメイトの机を、わざわざぞうきんで、ていねいに掃除するなんて。

思いつく理由なんて、一つしかない？

「ねえクロ」

『なんだ』

私は舞奈ちゃんと、それを呆然とした様子で見つめる幸人君から背を向け、声をひそめて聞く。

「……どう思う？ あの二人」

『はあ？』

意味が分からん、とでも言いたげに声を上げるクロ。

空気を読みなさいよ、ちよっと考えれば、私の聞きたいことくらいわかるでしょ！

「だーかーら！ どう見ても両思いよね」 そう思うでしょクロ！」

するとあるうことか、死神黒猫サマはバカにしたように目を細めた。

『落ちこぼれの上に、ガキかお前は。なんでもかんでも色恋につなげようとするな！ カン
違いめ』

私はクロの耳を引っ張った。

「なんでそこまで暴言吐かれなきゃいけないわけ」 なによ、まさかそんなに私に『頭かた
い』って言われたこと根に持ってるわけ」

『フン。ゆるい脳みそよりました』

「子供かあんたは！」

ふてくされたようなクロの態度に、私が思いつ切りツツコんだ時だった。

……ぞわり、と。

背中に気味の悪い寒気が走った。

「な、なに……」

背後に、何かいる……」

私がおそろおそろ振り向くと、そこには。

「！」

————ざわざわとうごめく、黒い影がいた。

6 黒い影との戦い

「なッ……何、あれ……!?」

さっきまで、何もなかったはずの教室中央。……そこであぐめいているのは、黒く濁った影みtainなものだった。

キシヤー……という、空気の軋むようなかすかな甲高い音は、まさかこいつの鳴き声？

『アア……ミエル……ノネ……アアア……ウタシノ、コト……』

「ひっ」

黒板をひっかいたような甲高い音と、低くおどろおどろしい声でつむがれた言葉に、私はのどの奥で悲鳴を漏らした。

な、なんで……どこから出てきたのよ、これ！

……影がうずまくその隙間から、舞奈ちゃんが相変わらず幸人君の机をみがいているのが見えるけど……。

もしかして舞奈ちゃんは、これに気づいてないの……!?

「伊織！ そいつなんだ、その『影』！」

「え……!?」

幸人君が焦った声を上げ、私は顔を黒い影に向ける。

やっぱり……こいつがそうなんだ。舞奈ちゃんに、悪影響を与えている原因。

「たまに見かけるんだけど……、なんで……!? ここまで大きい影を見たのは初めてだ……っ！」

「ほんっと、気持ち悪いわね……っ」

ぞわぞわと背筋を走る悪寒にたえつつも、私は影を観察する。

……うごめくそいつの、中央あたりで光る、二つの点。

あれってもしかして、目？ だとしたら、もしかするとこの影って、もともとは……！

「早く助けなきゃ……盛岡！」

『待て』

「ッ！」

舞奈ちゃんのところへ駆け寄ろうとした幸人君を止めたのは、クロのするどい「にゃッ！」

という鳴き声だった。

私にはちゃんと『待て』と聞こえたけど、どうやら彼にもその意志は伝わったらしい。

戸惑った顔で、クロと私の方を見る。

『……伊織。幸人をそこから離れさせろ。あれは低級だが、力は強い地縛霊だ。……憑かれれば、伊織や俺はともかく、霊界で手続きも受けていない浮遊霊の幸人じゃ、あっという間に喰われて消えるぞ』

「うん……うん！」

私はクロを下におろすと、幸人君のうでをつかみ、教室の隅まで引っ張っていく。

びつくりしたのか体勢をくずし、しりもちをついた彼に、私は言った。

「……近付いちやダメ。あれに憑りつかれば、霊力を魂ごと喰われて消えちゃう！」

「で、でも……盛岡が……」

……そうだ。

まだ、舞奈ちゃんはその影の中心にいるんだ。

本人は気づいてないみたいだけど、あの中にいるせいで、少なからず悪い影響を受けているというのも確かだ。

かといって、私にはどうしようも……。

『問題ない。この程度の霊をあの世に送れない死神など存在しない』

「く、クロ……危ないって！」

いっこうにこつちに寄ってこないクロを心配したのか、幸人君が声を上げる。

身乗り出そうとする幸人君を手で制すると、私はクロを見た。

「クロ……」

『お前も死神を目指すなら、覚えておくといい。死神は、言霊ことだまによって自らの霊力を開放する。……今から考えておいて損はないぞ、鎌を変化させられないなら特にだ』

「はあ？」

言霊……。それって、そのものに力を宿るって言われる言葉のことでしょう？

それが今の状況に、何の関係があるの？

……クロは少しだけこちらを振り向くと、銀色の目を細めて。

『……元の姿に戻るまでもないな』

……再び一度だけ、「にゃあ」と鳴いた。

——『常夜の帳、舞い降りる』

……刹那。

クロを中心に、深い闇が広がった。

……それは、うごめく影よりも、よほど黒い闇。

そして、上へと巻き上がっていくと、闇の粒子は上空に集まって、何かを形作っていく。

「……あれ、鎌……」

するどく、とぎすまされた刃。

上空に佇むそれには、アリシアや他の入学生たちの鎌とは違って、装飾は何もない。

……まるで闇の塊のような、真っ黒な大鎌。

『行け』

クロの声に、黒い大鎌が空気を薙いだ。

一陣の風が吹き、私は思わず目を閉じる。

『いい加減、あきらめてあの世へ行け』

『ギイヤアアアアア……!!』

……バシユンツツ!

甲高い悲鳴をあげながら、大鎌によって胴体を分断された黒い影が、霧散する。

その声に思わず耳をふさぐと、それと同時にクロの周りの深い闇も消えた。

「ウソでしょ……」

カンペキに消えてしまった影……地縛霊に、呆然とする。

信じられない。

これが……、プロの死神の力。

「すご……いい、今の、まさか、クロがやったの……」

「……そう、みたいね」

幸人君の声が震ふるえていて、同じように私の声もふるえる。

私も、しずくちゃんに言われてなんとなくここまで来ちゃったけど、やっぱりこんなのと

戦う仕事をするんだ、死神って……。

『伊織。もう近寄っても問題ないぞ』

「あ……うん。幸人君、もう舞奈ちゃんのとこに行っても大丈夫みたいよ」

「そ、そうだな。……盛岡！」

声は届かないとわかっていながら、あわてて彼女に駆け寄っていく幸人君。

彼の背中を見つめながら、私はかたわらのクロに尋ねる。

「ねえ。さっきの、『常夜の何とか』っていうのが、言霊？」

『そうだ。俺の属性は『闇』だから、それを意識した言葉になっている。参考にして、お前も考えておけよ。いずれ学院でも教えられるはずだ』

「……まだ、授業始まってないけどね……」

っていうか、入学したての実力試験すら終わってないけどね！

『……伊織。今回の任務、そう簡単には達成できないかもしれないな』

「え。どういうこと？」

もう地縛霊も追い払っちゃったし、あとは幸人君が想いを伝えるだけじゃないの？

まさか、それで未練解消できないってこと？

そう聞くと、クロは『いや』と否定する。

『そうじゃない。確かにあの霊は倒したが、盛岡舞奈には靈感はなくてもどうやら霊力が高いらしいな。この学校が強い霊的磁場となっているのもあいまって、彼女の霊力は地縛霊や悪霊に食い物にされているようだ。……早くどうにかしないと、取り返しがつかなくなるぞ』

……霊力が、食い物にされている？

それって、主な原因を取り除かないと……つまり、この学校がパワースポットのな場所であるってことをどうにかして変えないと、舞奈ちゃんには延々とああいふ霊がたかってくるってことだろうか。

それで、ずっと彼女の霊力は吸われ続けていくと？

……そんなの、よく考えなくたって危険だってわかるよ。

『だが、おかしいな……確かにここはお前の言うパワースポットだが、人に害を及ぼす霊がひんぱんに出没するほどの強さじゃなかったはずだ』

「……え、そうなの？」

『ああ。それなら、死神協会の会員である死神たちが何らかの対処をしてるはずだ。危険なパワースポットを、雨城会長は見過ごさない』

……それが絶対的な信頼から発された言葉だつてことは、すぐにわかった。あのエラそうなクロが、ここまで言うなんて、ちょっと驚きだ。

雨城筆頭死神。それは、序列第一位の死神協会会長であり、属性が『水』という以外、正体も容姿もまったく知られていない、霊界最強の存在だ。

クロは、その雨城会長と知り合いなんだろうか。

『……それとも、だれかが悪霊をあやつってるのか？』

「え？」

『……いや』

クロが頭をうつむかせ、目をまたたかせたのがわかる。

悪霊をあやつってる？ それってまさか、だれかが故意に舞奈ちゃんの霊力をうばってるってこと……？

「そんなの……許されるはずないじゃない」

『……一つだけ心当たりがあるが、まだ推測の段階を出ない。……それに、仮にそうだったとしても、お前の出番はないぞ。まだ見習いにもなっていないお前じゃ何もできない』

「……」

まったくもってその通りで、今度は私がうつむく番だった。

確かに、私に力はないけど……関わっちゃった人間を見て見ぬふりできるほど、私は神経図太くないよ。

「ねえ、クロっていったい……」

何者なの？

そう聞こうとした時だった。

「盛岡！」

……どさ、という人が倒れる音と、幸人君の悲鳴が聞こえてきたのは。

7 靈感を持つ先生

「ま、舞奈ちゃん！」

私はあわてて、教室中央に駆けていく。

そこには、さっきまでいいねいに机をふいていたはずの舞奈ちゃんの姿はない。

「伊織……どうしよう！」

……なぜなら、彼女はその場に倒れてしまったから。

蒼白な顔の幸人君のそばにしゃがみ、意識を失った舞奈ちゃんの顔色を見る。

……土気色。

死んでいるはずの幸人君より、よっぽど生氣のない色だ。

息はあるみたいだけど、危険な状態なのは一目瞭然。

……そしてまた、原因がああ影みたいな地縛霊にあるということも明らかだった。

「早く助けを呼ばないと……きゅ、救急車！」

「そ、そうね！ 幸人君、学校内に電話は……、それとも先生はどこっ？」

……しかし、あわてて立ち上がろうとした私を制したのはクロだった。

『待て、どこへ行く気だ伊織』

「どこって……決まってるでしょ。舞奈ちゃんの体調が悪化したことを、だれかに伝えなくちゃ」

『だから脳みそがゆるいと言ってるんだ、このバカ。……忘れたのか？ お前たちは霊体だぞ。だれがお前たちの声を聞ける？ だれがお前たちの姿を視ることができるんだ』

「……！」

私は思わず、幸人君を振り返った。

クロの言葉がわからない彼は、私が一人で何かをしゃべっているように見えるだろう。

でも、私の動揺は伝わったようで、焦ったようにつばを飲み込む。

『……いい加減自覚しろ。伊織も幸人も、本来なら人に干渉することは許されない死人だ。いつまでも生きている人間だと錯覚したままだと』

……今度は、お前たちがあの『影』になるんだぞ。

厳しい声が、耳に突き刺さった。

「じゃあ……どうすればいいって言うのよ」

私だって、好きで死んだわけじゃない。たくさんやりたいことだってあった。

……だから、同じ苦しみを舞奈ちゃんに経験してほしくない。
やりたいことや、伝えたいことを残したまま後悔して死んでほしくないんだ。

幸人君だって、きつと私と同じような気持ちだろう。彼は、舞奈ちゃんに想いを伝えられないまま屋上から落ちてしまったんだから。

……確証はないけど、きつと舞奈ちゃんだって幸人君が好きなはず。

たとえその声が届かなくても、彼が想いを告げるまで、私はゼツタイに彼女を守り抜きた
い。

何より、あの影みたいなのので、舞奈ちゃんが死ぬなんてことがあったら……そんな
理不尽かわいそうすぎる！

『まずは落ち着いてよく考えろ。彼女がこのままずっと……たとえば夜や、明日の朝まで放
置されれば、たしかに命に関わるかもしれない。……だけど俺の見た感じ、そこまで一刻を
争う状態じゃなさそうだ。だったら探すべき人間がいる』

探すべき人間、と私がくり返すと、クロは「そうだ」というように、にやり、と鳴いた。
『強いパワースポットの周辺に住む人間には、靈感が強い者が多い傾向がある。この学校に
も霊の音が聞こえたりするやつがいるかもしれない。幸人に聞いてみる』

そ、そうか！

現に舞奈ちゃんも、靈感は持ってなかったけど、霊力が強かったから地縛霊に狙われた。
それなら、靈感を持つてる人間がいてもおかしくはないはず。

いちかばちか、賭けてみる価値はあるんじゃない？

「幸人君！ 君の記憶のはんちゅうでいいから教えて！ 靈感を持つてるっぽい人って周
りにいなかった？」

「え、え？ いきなりどうしたの？ ……それより盛岡が」

「舞奈ちゃんにも関係あること！ もし靈感のある人がこの学校にいるなら、彼女の異変
を伝えられるかもしれないでしょ！」

私の言葉に、幸人君はハツとした顔になった。

真剣な表情で手をあごに当てると、何かを思い出すように眉間にしわを寄せる。

……そして。表情を明るくした幸人君が、顔を上げてさげんだ。

「い、いたよ！ 多分だけど！」

マジか！

「ほ、ほんとに……ほんとにそんな人いるの？」

「ほんとだよ！ たしか、そういう霊的なウワサがある神社で頭が痛くなったり、墓地去くと声が聞こえてきたりするって言ってた。姿が見えるかどうかかわからないけど、声はもしかしたら聞こえるかもしれない……！」

『……へえ。それはたしかに、靈感の強い人間の特徴だな』

クロの言葉に、私の気持ちもがぜん上がってくる。

「それに、たしか一か月前くらいから、靈感が強くなってきつてだれかから聞いた気がするよ。……あの人に教わってる生徒の話聞いたのかな、俺」

「教わってる？ ……ってことはその靈感強い人って、もしかして」

うん、と幸人君はうなずいた。

「社会科の古谷先生だよ。一年三組の担任の先生でもあるんだ」

……古谷先生。

その名前、どこかで聞いたことがある、ような。

「今、その先生ってどこにいる？」

「多分、職員室だと思うけど……問題は、どうやってそこにいる古谷先生に声を届けるかだけど……うーん、職員室の扉の前からさげんたら、聞こえたりするかな……」

幸人君の言葉に、そうね、と同意しようとした時。

……私は思い出した。その名前をどこで聞いたのかを。

「……幸人君。呼びに行く必要はなくなったみたいよ」

「え？」

「だって、その古谷先生って……」

ガラリ。

私が言い終わる前に、教室のうしろの扉が開いた。

……入ってきたその人は、まだ二十代後半くらいの、長身の男性。

呆然として彼を見つめたまま、幸人君はびくりとも動かない。

「おーい盛岡、日誌まだか……って、盛岡」

「ふ、古谷先生」

なんでここに、というように瞠目する幸人君を横目で見つつ、とりあえず私はホッと息をついた。

ともかくこれで、舞奈ちゃんは無事でいられるだろう。

……例の『影』が現れる前に、教室を出て行った女の子たちに向かって、彼女はたしか「日誌を古谷先生に届ける」と言っていたはずだ。

その日誌の提出が遅かったら、きっと催促をしに来るだろうと思ったんだけど……思ったより早く来てくれたみたい。

……よかった。

「……ん？ 今、なんか声が……」

顔を上げた古谷先生が、舞奈ちゃんから少し距離を取った場所にいる私たちに、目を留めた。

……あ、あれ？ ……目を、留めた？

普通の人からしたら、私たちのいる場所には、何もないはず。

なら、この先生は……。

「な、なんで黒猫が学校内に……！ し、しかも君は他校生だよな。なんで勝手に教室に……」

そこまで言うてから、彼は私たちの横に立って、戸惑いの表情を浮かべている幸人君に視線を移す。

その目がみるみる大きく見開かれていくのを見て、私はきたる騒音に備えて耳をふさいだ。……そして。

8 たのみごと

「え、えええええつつつ な、なんで……泉」

「うわあああつゝ 耳がっ！ ……ちよつと、耳元でさげばないてくださいよ！」

「あ、ああ……すまん……？」

耳を押さえて、涙目で怒鳴る幸人君に、いまだ混乱している古谷先生は素直に謝った。

「まったく……」

……そりゃ、誰だつてさげぶわ。

死んだはずの生徒が、いきなりユーレイとして自分の目の前に現れたら。

むしろ、いきなりそんなことがあったら、私なら気絶する自信がある。

『……これはなかなかの靈感の持ち主だな。俺たちの姿が視えるのか』

「……まあ。そのせいで、今の混乱状態が出来上がったわけだけどね……」

あわてまくる二人を見て、うんざりする。

こんなのを私が落ち着かせなくちゃならないのか……。

『さつさとやれ。話が進まない。盛岡舞奈も不憫だ』

「はいはい」

うなずくと、私は大きく息を吸って。

「いいからとつと舞奈ちゃんを保健室に運べええええええ!!」

*

……養護の先生に舞奈ちゃんを預け、ついでに親御さんに連絡をしてもらったらしい古谷先生が、保健室から出てくる。

幸人君が彼に駆け寄り、「盛岡は……？」とひかえめに尋ねた。

「大丈夫だ。ただの貧血だつてさ。まあ、普通の貧血より体力を失ってるみたいだが、寝て食べれば治るみたいだ」

「そ、そうですか……」

ほっとしたような幸人君を見て、古谷先生は戸惑ったように笑う。

……現状に混乱してる感が、まだ出てるな。それはまあ、仕方ないんだけど。

「それで……泉。お前、生き返ったわけ……じゃないよな」

「そりゃ、そうですよ先生。さすがにそんなこと、あるわけないじゃないですか。ただまだ

成仏できてないだけです」

「そっかー……ってそれもよくないだろ、バカ」

苦笑しつつそう言うと、古谷先生は少しほえんだ。

「……でも。ユーレイでも、お前にもう一回会えてうれしいよ、泉。クラスの生徒が事故で亡くなって、俺もすごくショックだったんだぞ」

やさしげな声に、幸人君が哀しげに目を伏せる。

いい話だ、と私は涙ぐむけど、クロはくだらないとでも言いたげに鼻を鳴らす。

……ほんと、冷たい猫だな。

いつそのこと冷酷黒猫って呼んでやろうか。

「でも先生が、盛岡を呼びに来てくれてよかったです。俺たちの姿は他の人には視えないから、どうしようかあわててたんです」

「そうだったのか……タイミングはよかったんだな」

『俺はあわててない』

クロさんや。そこで自慢しても、誰にも聞こえてないぞ。

「それで……泉。彼女たちは？ 泉のユーレイ仲間か？」

ユーレイ仲間ってなんだ……と思いつつながら、私はビミョーな目で先生を見つめる。

……よくわからないけど、少し警戒されているようなので、一応名乗ることにした。

「あー……私は、井角伊織っていいいます。死神です」

「死神……ッ？」

ひきつった声を上げ、古谷先生は大きく後ずさった。

その顔には、さつきとは比較にならないほどの警戒の色が浮かんでいて。

イヤ、そんな怖がらなくても……。

……まあ、無理もないか。

いきなり死神って名乗る霊体が目の前に来たら、そりゃ誰だって、面食らうどころか気絶ものだよな。

と、いうことで私は弁解する。

「……大丈夫です。何も先生に死の宣告をしにきたわけじゃないですから。……私は、幸人君を成仏させるために来たんです」

……途端、あからさまにほっと息をつく古谷先生。

「な、なんだ。びっくりしたよ……そうだったのか」

『それにそもそもこいつは死神じゃないしな』

なおも言い募るクロを、私は睨みつける。

チツ、いつまでも細かいことをごちゃごちゃと……。だから頭がかたいつて言われるのよ、私に。

……まあ、それにしても、一応は警戒を解いてもらえたようでよかった。

すごい怯えた顔だったからね、さっきの古谷先生。

「で、なんで盛岡は倒れたんだろうなあ……。帰りのHRでもそう調子が悪いようには見えなかったんだけど」

「……先生、もしかして視たことないんですか？ 盛岡の周りに、黒い影みたいなのが取り巻いてるところ」

「黒い影？」

げげんそうに眉をおせる古谷先生は、どうやら霊力を食らう影……ときたま出没する地縛霊には気づいていなかったようだ。

靈感があっても、必ずしもそういう気配がわかるわけではないらしい。

……そもそも、授業中に彼女は倒れていないんだから、影は放課後にしか現れないのかもしない。

「そうか……先生も、くわしいことは知らないですね……」

「どういうことだ？ その影っていうのは、盛岡が倒れたことに関係してるのか？」

尋ねてきた古谷先生に、幸人君が迷ったようにこちらを振り向いた。

話しているか、悩んでいる顔だ。

……少しだけ考えたあと、話した方が先生も気を配ってくれるだろうという結論に至り、私はうなずく。

それを見て、話し始める幸人君。

「……えっと。その影は、伊織によると地縛霊とか、悪霊のたぐいらしいんですけど。盛岡は、そいつらのせいで最近具合が悪くなりやすくなってるみたいなんです」

「え……それ、本当か？」

今度は驚いたように、彼は私を見る。

再びうなずいてみせると、先生は「そうか……」とつぶやいて思案顔になった。

「……わかった。俺も、これ以上生徒に何かあるのはゴメンだし、もっと気を配ってみるよ。……まあ、その影ってのは見たことないけどな」

「先生……ありがとうございますっ」

いきおいよく、頭を下げる幸人君。

そのように、古谷先生は少しだけ心配そうに眉を寄せる。

「……でも俺は、ずっと生徒全員の様子を見ていられるわけじゃない。それに悪霊みたいなのを祓う力もないんだ」

「それでもいつもより気を配ることで、盛岡みたいにだれかが倒れた時、すぐに助けられるかもしれないじゃないですか。それでじゅうぶんです」

おお、なかなかいいこと言うじゃない、幸人君。

舞奈ちゃん……好きな人ばかりに目が行ってないって、けっこうすごいことだと思うよ。

「そうか……盛岡もまた狙われるかもしれないだろ？ 井角さんも見ててやってくれな。

男子にじろじろ見られるよりも、盛岡も女子に気を配ってもらった方がいいと思うぞ。

泉だって大人しいとはいえ思春期の男子だしな」

「なッ……先生！ じろじろってなんですか！」

幸人君が赤くなりながら、先生をにらみつける。

……なんか、幸人君、必死でかわいいんだけど。

「……わかりました。幸人君が変なことしないか監視しつつ、彼女の周りにも気をつけます」
「ちよ、伊織！ なんて俺が何かすることになってるわけ？」

私が大真面目にうなずくと、案の定あわてはじめる幸人君。

……いやあ、ほんと見てて面白いわあ。

これで舞奈ちゃんが気づいてないこと自体が、また面白いわあ。

『……ゲスだな』

「うるさいよ」

呆れたような声に、私はふんと鼻を鳴らした。

……ほんと、クロってジジくさいんだから。頭かたいし。

黒猫なんかには、青春の恋バナの下キドキ感がわかってたまるかっての。

職員室に帰っていく先生を見送りつつ、私はふうと息を吐く。

……とまあ、ふざけてはみたんだけど、事はそんな簡単じゃないのよね。

幸人君が未練を消すには、舞奈ちゃんが襲われる心配が亡くなった上で、想いを告げる必要がある。

どうしてひんばんに黒い影……つまり悪霊や地縛霊が出てくるような、その原因を調べなくちゃいけない。

『……この任務、やはり思ったよりやっかいなものになりそうだな』

クロのぼそりとしたつぶやきに、私はゆっくりとうなずいた。